

# テイラーの運命論について

伊佐敷 隆弘

**Taylor on Fatalism**

**Takahiro ISASHIKI**

## 要 旨

テイラーの提示した「海戦」版と「オズモ」版の2つの運命論の妥当性を検討する。「海戦」版運命論は「過去の確定性から未来の確定性を導く」という構造を持つ。過去の確定性を条件的に解釈すればこの議論は成り立つが、因果的に解釈できる余地があるのでこの議論は成り立たない。「オズモ」版運命論は、「真理値の変更不可能性」に基づいて、未来の出来事の不可避性を主張する。しかし、真理値の変更不可能性を「Pならば (Pは不可避だ)」と解釈することは論点先取であり、かつ、「必然性」「現実性」「可能性」概念の区別の放棄を伴う。結局、テイラーの議論は成功していない。

## 目 次

はじめに

### 1. 決定論

- (1) 決定論とは何か
- (2) 3種類の決定論：物理的決定論・神学的決定論・論理的決定論
- (3) テイラーの運命論：「海戦」版と「オズモ」版

### 2. 「海戦」版の運命論

- (1) 議論全体の構造
- (2) 論証 の多義性：条件的解釈と因果的解釈

### 3. 「オズモ」版の運命論

- (1) オズモの物語
- (2) 議論全体の構造
- (3) 「海戦」版と「オズモ」版のつながり：条件的解釈の拡張
- (4) 論点先取の誤謬
- (5) 必然的真理・現実的真理・可能的真理の範囲の一致
- (6) 「不可避性」について

### 4. 結論

## はじめに

本論文における「運命論」とは「論理的決定論」のことである。「論理的決定論」とは「『すべての出来事はあらかじめ決定されている』ということが論理的な根拠だけに基づいて証明できる」という主張である。それは古代から存在する主張だが、本論文では、20世紀アメリカの哲学者リチャード・テイラーが提示した論理的決定論の2通りの議論を検討し、彼の議論が成功していないことを示す。

## 1. 決定論

## (1) 決定論とは何か

日常生活においてほとんどの人々は、「過去は確定しているが、未来はまだ確定していない」と考えている。即ち、「既に起こってしまったことを起こらなかったことにすることも、逆に、起こらなかったことを起こったことにすることも、今となっては不可能である。他方、未来に何が起こるのか、どんなふうになるのか、それはまだ決まっていない。少なくとも私自身がこれから或る行為を行なうか否かは私の選択次第である。例えば、10分前に私が座っていたという事実は今更変えようがないが、10分後に座っているか立っているかはまだ決まっておらず、私自身が自由に選ぶことができる」。このように大抵の人々は過去と未来とを「確定 (fixed) した過去」と「未決定 (open) の未来」という仕方で対照的に捉えている。

これに対し、「未来も、過去と同様、その細部に至るまですべて既に確定している。それゆえ、また、我々自身が自由に選択しているつもりのものであるが、何をどのように行なうか細部まで実は既に決まっているのだ」という主張が古代からある。この主張は「決定論 (determinism)」と呼ばれている。

もちろん、決定論者でない人々も、明日太陽が東の空から再び昇ることや、今、手から鉛筆を離せば床へ向かって落ちることを疑いはしない。また、今から48時間以内に私が少なくとも1回食事をすることはおそらく確定だろう。このように、決定論者でない人々も、未来に起こることの一部に「既に決まっている」と言えることが含まれていることを認めている。

しかし、決定論者はさらに強い主張をする。即ち、決定論者は「未来に起こることの一部でなくそのすべてが細部に至るまで決定済みである」と主張する。例えば、「千年後の今日、地球上に何羽の白鳥が生きているか」も、「10分後に私が立っているか」も、今の時点で既に決定済みであると決定論者は主張する。上述のように、ほとんどの人々は「自分自身が知っている」といまいと、過去はその細部まですべて確定しており、未決定の部分は残っていない。それゆえ、また、過去に影響を与えることはできない」と考えているが、決定論者は未来に関しても過去と同じ様に考える。即ち、「明日の日の出や私の手から離れた鉛筆の落下だけでなく、未来に起こるありとあらゆることが、そのいかなる細部に関しても、未決定の部分を残しておらず、既に確定している。したがって、自分自身の行為に関しても、何をどのように行なうか実は既に決まっている」。決定論者はこのように考えるのである。

要するに、決定論者でない人が「確定した過去」と「未決定の未来」というふうに対照的に捉えるのに対し、決定論者は過去と未来のどちらも「確定」したものと捉えるのである。両者の考え方の違いを表にまとめると次の表1のようになる。

	過去	未来
決定論者でない人	確定	未決定
決定論者	確定	確定

表 1

### (2) 3種類の決定論：物理的決定論・神学的決定論・論理的決定論

決定論は、決定の根拠の違いに応じて3つの種類に分けることができる。即ち「物理的決定論 (physical determinism)」「神学的決定論 (theological determinism)」「論理的決定論 (logical determinism)」の3つである。

物理的決定論は、「先行状態が後行状態を（物理法則に従った仕方）で因果的に決定する」と主張する。即ち、物理的決定論の場合、決定の根拠は物理法則<sup>1)</sup>である。

神学的決定論の場合の決定の根拠は神の全知である。即ち、「時間の始まりから終わりまでの間に世界で生じるすべての出来事を神が知っている以上、これから先の未来に何が生じるかは既に決まっている」という主張<sup>2)</sup>である。

論理的決定論の場合の決定の根拠は排中律を初めとする論理的真理である。

これら3種類の決定論のうち本論文で取り上げるのは論理的決定論である。論理的決定論に関する議論は、古代のアリストテレス<sup>3)</sup>（前4世紀）やディオドロス・クロノス<sup>4)</sup>（前4～3世紀）以来の長い歴史を持つが、本論文では、アメリカの哲学者リチャード・テイラー<sup>5)</sup>（Richard Taylor, 1919～2003年）による議論を取り上げる。1962年に雑誌『フィロソフィカル・レビュー』に発表され翌1963年に加筆されて彼の著書『形而上学』第1版に収められたテイラーの議論<sup>6)</sup>は、論理的決定論を大胆に主張し、英米哲学界に多くの議論を引き起こした。なお、テイラー自身は彼の議論を「運命論 (fatalism)」と呼んでいるので、本論文においてもそれに従う<sup>7)</sup>。

### (3) テイラーの運命論：「海戦」版と「オズモ」版

テイラーは彼の運命論を論証する2つの議論を提示している。一つは、上述の『形而上学』第1版（1963年）における議論である。そこでは、「翌日の海戦の命令を出そうとしている司令長官の話」が例として用いられている。もう一つは、『形而上学』第2版（1974年）において大幅に改訂された議論<sup>8)</sup>であり、「自分の一生を記録してある本を手に入れた青年オズモの物語」を例としている。本論文においては、まず、第2節において、前者の「海戦」版の運命論について検討し、次に、第3節において、後者の「オズモ」版の運命論について検討する。

## 2. 「海戦」版の運命論

### (1) 議論全体の構造

テイラーの「海戦」版の運命論について、まず、その議論全体の構造を見よう。それは、一言で言えば、「過去の確定性から未来の確定性を導き出す議論」である。しかし、前述のように、日常生活においてほとんどの人々は非運命論者であり、「過去は確定しているが、未来は未決定である」というふうに過去と未来を対照的に捉えている。非運命論者にとって、過去の

確定性を認めることは未来の確定性を認めることに直結しない。では、テイラーはどのようにして過去の確定性から未来の確定性を導き出すのか。それは、「過去の確定性を認める根拠と未来の確定性を認める根拠は同一だ」と主張することによってである。要するに、テイラーの「海戦」版の運命論は次の図1のような構造を持っている。

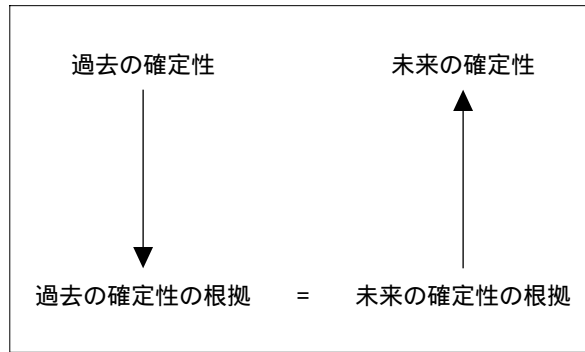


図1

では、テイラーの議論を細かく見て行こう。テイラーによれば、人々が「過去の確定性」を認めるのは、例えば、次のような論証 による。

【論証】

私は朝刊を見て「昨日海戦が行なわれたか否か」を知ろうとしている。

1. もし昨日海戦があったなら、「海戦起らず」の見出しを見る力は私にはない。
2. もし昨日海戦がなかったなら、「海戦起る」の見出しを見る力は私にはない。
3. 昨日海戦はあったか、なかったかのどちらかである。
4. したがって、「海戦起る」の見出しを見る力が私にないか、或いは、「海戦起らず」の見出しを見る力が私にないかのいずれかである。それゆえ、「私には今『海戦起る』の見出しを見る力があり、かつ、『海戦起らず』の見出しを見る力もある」という命題は偽である。

ただし、テイラーは記号P, P', S, S'を次のように定義して論証 を下のように書いている。

P : 命題「昨日海戦があった」

P' : 命題「昨日海戦がなかった」

S : 「海戦起る」の見出しを見る行為

S' : 「海戦起らず」の見出しを見る行為

【論証】

1. もしPが真なら、S'をする力は私にはない。
2. もしP'が真なら、Sをする力は私にはない。
3. Pが真であるか、または、P'が真である。
4. したがって、Sをする力が私にないか、または、S'をする力が私にないかのいずれかである。それゆえ、「私には今Sをする力があり、かつ、S'をする力もある」という命題は偽である。

論証 の結論 4 は「過去の確定性」を意味している。そして、テイラーも言うように、運命論者も非運命論者も結論 4 を受け入れるであろう。また、前提 1～3 を認めれば結論 4 も認めなければならないこと、即ち、論証 が形式的に妥当な推論であることも明らかである。

論証 に続いて、テイラーは、「未来の確定性」を結論に持つ次の論証 を提示する。

【論証】

私は艦隊の司令長官であり、「今日或る命令を出すか否か」を考えている。そして、今日その命令を出すと明日海戦が起こり、別の第二の命令を出すと海戦は起こらない。

1. もし明日海戦があるなら、第二の命令を出す力は私にはない。
2. もし明日海戦がないなら、第一の命令を出す力は私にはない。
3. 明日海戦はあるか、ないかのどちらかである。
4. したがって、第一の命令を出す力が私にないか、第二の命令を出す力が私にないかのいずれかである。それゆえ、「私には今第一の命令を出す力があり、かつ、第二の命令を出す力もある」という命題は偽である。

論証 と同様に、テイラーは記号  $Q$ 、 $Q'$ 、 $O$ 、 $O'$  を次のように定義して論証 を下のように書く。

- $Q$  : 命題「明日海戦がある」
- $Q'$  : 命題「明日海戦がない」
- $O$  : 第一の命令を出す行為
- $O'$  : 第二の命令を出す行為

【論証】

1. もし  $Q$  が真なら、 $O'$  をする力は私にはない。
2. もし  $Q'$  が真なら、 $O$  をする力は私にはない。
3.  $Q$  が真であるか、または、 $Q'$  が真である。
4. したがって、 $O$  をする力が私にないか、または、 $O'$  をする力が私にないかのいずれかである。それゆえ、「私には今  $O$  をする力があり、かつ、 $O'$  をする力もある」という命題は偽である。

前提 1～3 を認めれば結論 4 も認めなければならないこと、即ち、論証 が形式的に妥当な推論であることは確かである。そして、論証 の結論 4 は「未来の確定性」を意味している。非運命論者は「司令長官の私は、どちらの命令でも出すことができる。どちらにするかは私の選択次第であり、それゆえ、明日海戦が起こるか否かはまだ決まっていない」と考えるが、結論 4 によれば、私にそのような選択を行なう力はない。

テイラーは、以上のように論証 と論証 を提示した上で、次のように言う<sup>9)</sup>。「過去に関する運命論 [即ち過去の確定性] に与える理由 [論証 ] は、同時に、未来に関する運命論 [即ち未来の確定性] に与える理由 [論証 ] でもある」。また、「未来に関する運命論 [未来の確定性] への反論は、同時に、過去に関する運命論 [過去の確定性] への反論でもある」。要するに、論証 と論証 は、一方が成り立てば他方も成り立つし、一方が成り立たなければ他方も成り立たない、そういう関係にある。そして、「論証 をわずかでも疑う人は誰もいない」。テイラーはこのように主張する。

結局、テイラーによれば、次の議論が成り立つ。

- (i) 過去の確定性を認める者はみな、論証 を認めなければならない。

(ii) 論証 を認める者はみな、論証 を認めなければならない。

(iii) 論証 を認める者はみな、未来の確定性を認めなければならない。

こうして、過去の確定性から未来の確定性が引き出されたことになる。

テイラーの議論の構造を図示すると先の図1は次の図2のように書き換えることができる。

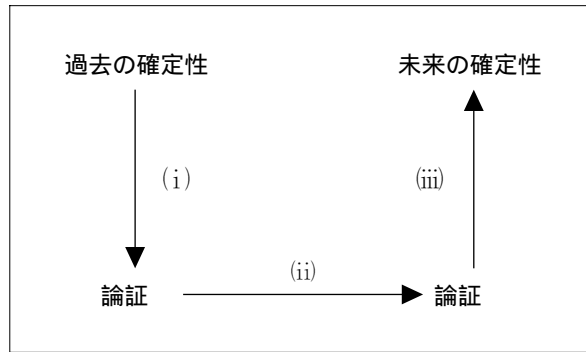


図2

以上が、テイラーの「海戦」版の運命論の議論の大筋である。

## (2) 論証 I の多義性：条件的解釈と因果的解釈

では、テイラーのこの議論は正しいのか。まず、「過去の確定性を認める者は実際に論証を行なっている」とテイラーが主張しているなら、その主張は明らかに誤りである。非運命論者が過去の確定性を認める理由は単に「過去だから」ということに過ぎない場合が多いであろう。つまり、独断的に過去の確定性を信じている非運命論者が多いであろう。しかし、テイラーは人々の心理的事実に関する主張をしているわけではない。テイラーの主張 (i) 「過去の確定性を認める者はみな、論証 を認めなければならない」は、「そのような独断的非運命論者もその根拠を求められたら論証 に訴えざるをえない」ということを意味すると考えるべきであろう。

次にテイラーの主張 (ii) 「論証 を認める者はみな、論証 を認めなければならない」であるが、確かに、論証 と論証 とは形式的によく似ている。P, Qなどの記号を使って書かれた両者を比べると両者の形式的な一致は明らかである。テイラーも言うように、二つの論証は時制の点を除けば形式的には同じものである<sup>10)</sup>。

とすれば、「過去の確定性 論証 論証 未来の確定性」というテイラーの議論はうまくつながっているようにも見える。しかし、実はそうではない。

というのは、論証 は多義的であるがゆえに、テイラーの主張 (i) と主張 (ii) とは両立させることが困難だからである。即ち、或る解釈 (後述する「条件」的解釈) のもとでの論証 から論証 が帰結するが、そのような解釈を非運命論者は受け入れないであろう。他方、別の解釈 (後述する「因果」的解釈) のもとでの論証 なら非運命論者は受け入れるであろうが、そのように解釈された論証 から論証 は帰結しない。

まず、テイラーがどのような解釈をしているかを見てみよう。テイラーによれば、昨日海戦

が起こった場合、私が今日「海戦起こらず」の見出しを見るということはありませんから、「昨日海戦が起こらなかった」ということは「今日私が『海戦起こらず』の見出しを見る」ための必要条件である。したがって、前提1の「もし昨日海戦があったなら、『海戦起こらず』の見出しを見る力は私にはない」が真であるのは、「海戦起こらず」の見出しを見るための必要条件が満たされていないからである。テイラーはここで次の前提（ ）を置いている<sup>11)</sup>。

( ) 行為の生起に必要な条件が欠如しているなら、当該行為を実行することは不可能である。

この前提を「必要条件の欠如による実行不可能性」と呼ぶことにしよう。このように、テイラーは、「昨日の海戦」と「今日見出しを見ること」との関係を条件関係として解釈し、この前提（ ）に基づいて論証 の前提1が真だと主張する。

条件関係は、テイラーも言うように、時間と無関係である。それゆえ、論証 も論証 と同様に条件的に解釈することができる。

私が今日第二の命令を出せば、明日海戦は起こらないから、私の第二の命令は明日の不戦闘のための十分条件である。そして、一般に、AがBの十分条件であるとき、BはAの必要条件であるから、明日の不戦闘は私の第二の命令のための必要条件である。もし明日海戦があるなら、私の第二の命令のための必要条件是満たされない。したがって、上の前提（ ）により、論証 の前提1「もし明日海戦があるのなら、第二の命令を出す力は私にはない」は真である。

このように、テイラーは、論証 の「海戦(昨日)と見出しを見ること(今日)」の間の関係や論証 の「命令(今日)と海戦(明日)」の間の関係を条件的に解釈する。条件的に解釈すると、論証 と論証 の時制の違いは本質的なものではなくなる。こうして、条件的に解釈された論証 が成り立つなら、同じく条件的に解釈された論証 も成り立つことになる。

しかし、論証 に関して条件的解釈以外の解釈はありえないであろうか。ありうるであろう。例えば、テイラーに対する次のような反論がありうる。

論証 の前提1「もし昨日海戦があったなら、『海戦起こらず』の見出しを見る力は私にはない」が真であるのはなぜか。昨日の海戦が原因となって、「海戦起こる」の見出しが出現するからではないか。昨日海戦が起こった以上「海戦起こらず」の見出しは存在しない。存在しない見出しを見ることはできない。つまり、「過去の出来事(海戦)が原因で、その結果が現在の出来事(見出しを見ること)だ」という関係がここにはある。そして、因果に関して我々は、「原因から結果への向きは一方である。即ち、過去 現在 未来という方向しかない」という暗黙の前提を持っているであろう。即ち、「因果の一方性」という暗黙の前提である。そして、この暗黙の前提から、さらに、「行為の影響は過去へは及ばず、未来にしか及ばない」ということが帰結する。それゆえ、私が今何をしようと、昨日の海戦に影響を与えることはできない。だから、私には今さら海戦が起こらなかったことにする力はなく、それゆえ、「海戦起こらず」の見出しを見る力は私にはない。このように、論証 の「海戦(昨日)と見出しを見ること(今日)」の間の関係を因果関係として解釈することも可能であろう。条件的解釈が言うように「昨日の海戦が今日の見出しを見ることの必要条件」でありうるのも、前者が後者の不可欠の原因だからではないか。

では、論証 についてはどうか。テイラーの言うように、明日の不戦闘は今日の第二の命令のための必要条件であるが、なぜ必要条件なのか。テイラーの言うように、今日の第二の命令が明日の不戦闘のための十分条件だからである。では、なぜ十分条件なのか。ここでも因果関

係を持ち出すことができる。今日の第二の命令が原因となって明日の不戦闘が結果として生じるからである。因果的解釈のもとで論証の前提1が真であるのは、単に必要条件が満たされないからでなく、因果関係の一方向性の故であった。したがって、論証の前提1が単に「必要条件が満たされない」という理由だけで真になることは因果的解釈のもとではありえない。ところが、因果的解釈のもとで論証の前提1「もし明日海戦があるのなら、第二の命令（海戦を生じさせない命令）を出す力は私にはない」を見ると、これは偽あるいは無意味な命題である。というのは、因果的解釈のもとでは、論証の前提1は、「未来の出来事（海戦）が現在の出来事（命令）に影響を与える」と主張しているように見える<sup>12)</sup>からである。この「逆向き因果」の主張は「因果関係の一方向性」と矛盾する。というのは、因果関係の一方向性は「未来の状況は現在の行為に影響を与えない」ということを含意するからである。

要するに、因果的解釈のもとでは、因果関係の一方向性の故に、論証の前提1は受け入れられるが、同じ理由の故に、論証の前提1は受け入れられないのである。

このように、論証の解釈は条件的解釈に限られない。因果的解釈の余地も十分にある。因果的解釈だと、論証から論証は帰結しない。「海戦」版運命論の議論は、条件的解釈のもとでは、「過去の確定性（条件的に解釈された）論証（条件的に解釈された）論証 未来の確定性」というコースを辿る議論であるが、因果的解釈のもとでは、論証を認めつつ、論証を拒否することができるから、論証から論証は帰結しない。したがって、「過去の確定性（因果的に解釈された）論証」のところで議論は途切れてしまい、結局、過去の確定性から未来の確定性は出て来ない。

もし、過去の確定性を因果的に解釈するのは誤りであって、条件的に解釈するのが正しいのであれば、論証の多義性は消滅し、過去の確定性から未来の確定性が帰結することになる。しかし、テイラーは過去の確定性に関する因果的解釈が誤りである理由を挙げること成功していない。確かにテイラーは、論証も論証も「因果関係に全く言及していない<sup>13)</sup>」と言うが、これに対して非運命論者は「論証の前提1が真であるのは、暗黙の内に因果的に解釈しているからだ。なぜなら、昨日の海戦が今日の見出しを見る行為に影響を与えるのは、前者が後者の原因だからだ。そして、前者が後者の必要条件たりうるのも、この因果関係に基づいている。条件関係だけでは前提1は真にならない。ここでは因果関係が条件関係を支えているのであって、その逆ではない<sup>14)</sup>」と反論するであろう。

テイラーの主張(i)「過去の確定性を認める者はみな、論証を認めなければならない」が非運命論者に対しても説得力を持つのは、それが因果的解釈を誘うからである。しかし、因果的解釈のもとでは論証から論証は帰結しないから、その場合、テイラーの主張(ii)「論証を認める者はみな、論証を認めなければならない」は成り立たない。他方、条件的解釈のもとでなら、テイラーの主張(ii)は成り立つが、今度は主張(i)が非運命論者に対して説得力を失う。このように、論証の多義性のゆえに、テイラーの主張(i)と(ii)を両立させることは困難である。

尤も、過去の確定性の根拠について条件的解釈でも因果的解釈でもない考え方もありうる<sup>15)</sup>。しかし、いずれにしても、過去の確定性の根拠として、論証と論証を非対称的に扱うような解釈の余地がテイラーの議論から排除されていない以上、テイラーの主張(i)と(ii)の両立が困難であることは変わらない。

結局、過去の確定性から未来の確定性を導こうとするテイラーの議論は成功していない。



ただし、本節の議論が示したのは、過去の確定性が未来の確定性に直結しないということであって、過去の確定性に依拠せずに未来の確定性それ自体を直接に導く試みが不可能であることを示したわけではない。テイラーが『形而上学』第2版<sup>16)</sup>で新たに提示した「オズモ」版の運命論はまさにそのような試みである。

### 3. 「オズモ」版の運命論

#### (1) オズモの物語

テイラーの描く「自分の一生を記録してある本を手に入れた青年オズモの物語」の粗筋は次のとおりである<sup>17)</sup>。

26歳の青年オズモはインディアナ州の高校の教師である。或る日彼は町の図書館で『オズモの生涯』という題のほこりをかぶった本を見つける。その本には、彼がインディアナ州オーバン市のマーシー病院で生まれたこと、5歳のときに肺炎で死にかけたことなど、オズモ自身のそれまでの人生に起こった主な出来事が正確に記載されていた。オズモはその本をかかえて、図書館の向かいの喫茶店に行き、じっくりと目を通して見た。すると、オズモ自身も忘れていた昔のこと、例えば、7歳のときに死んでしまった小猫の名前が「フラッフィー」だったことや、逆に、つい最近の出来事、例えば、26歳の誕生日に雨が降っていたことなども書いてあった。さらに、その本には「図書館の向かいの喫茶店で読書に夢中になり、妻を美容院まで迎えに行くのを忘れてしまう」と書いてあったが、その箇所を読んだときオズモはまさにその日妻を美容院まで迎えに行く約束があったことを思い出したのだった。その本には、過去のことも未来のこともすべて現在時制の文で書いてあった。そして、1歳のときのことは第1章に、2歳のときのことは第2章に、というふうに、各章がオズモの各年齢に割り当てられてあった。オズモは26章よりも先の方を読んでみた。そこには、仕事がうまくいかなくなることや、スキーをしているときに足を骨折することなどが書いてあった。さらに読み進むと、その本は29章で終わっており、最後のページに、オズモはフォートウェイン空港の滑走路に飛行機が墜落したために死ぬ、と書いてあった。

その後、この本に書かれていることは次々にオズモの身に実際に起こった。オズモはフォートウェイン行きの飛行機にだけは乗らないよう気を付けていた。しかし、或る日、セントポール行きの飛行機に乗っていたオズモは、パイロットが「進路を変更してフォートウェイン空港に着陸する」とアナウンスしたとき半狂乱になり、その飛行機をハイジャックして他の空港へ向かわせようとした。その騒ぎのために飛行機は着陸に失敗し、彼は死んでしまったのであった。そのときオズモは29歳だった。

以上が、テイラーの描くオズモの物語である。

#### (2) 議論全体の構造

テイラーによれば、オズモの身に起こったことは我々全員に当てはまる。もちろんオズモのように、我々が自分の一生を記録した本を手に入れることはないであろうが、しかし、自分の一生についての真なる命題すべてからなる集合が各人一つずつ存在する<sup>18)</sup>ことはオズモの本の場合と同様である。このことは、排中律、即ち「いかなる命題も真であるか、または、偽である」という論理法則による<sup>19)</sup>。例えば、「10分後に私は立っている」という命題は真である

か、または、偽である。どちらであるか、私自身も知らないが、排中律によれば、真か偽のどちらかなのであって、どちらでもないということはありませんし、両方ということもありません。それゆえ、私の生涯に起こったこと、これから起こること、それらすべてを記述する真なる命題の集まりはただ一つしかない。

さらに、真である命題を偽に変えることはいかなる力をもってしても不可能である<sup>20)</sup>。もし「10分後に私は立っている」という命題が真であるなら、それを偽に変えることは、天地のどんな力 (no power in heaven or earth) によっても不可能である。つまり、もし、この命題が真なら、私は10分後に立っているという状態を回避することはできない。

私の人生を記述するすべての真なる命題に関して同じことが言えるから、私の身にこれから何が生じるかは既に決まっている。要するに、運命論は正しい。

以上が「オズモ」版の運命論の議論である。その議論は、「自分の一生についての真なる命題全体の集合がひとつ存在する」ということと、「真なる命題を偽に変えることは不可能である」ということ (真理値の変更不可能性) をその根拠としている。また、前者はさらに排中律を根拠としている。議論全体の構造を図示すると次の図3のようになる。

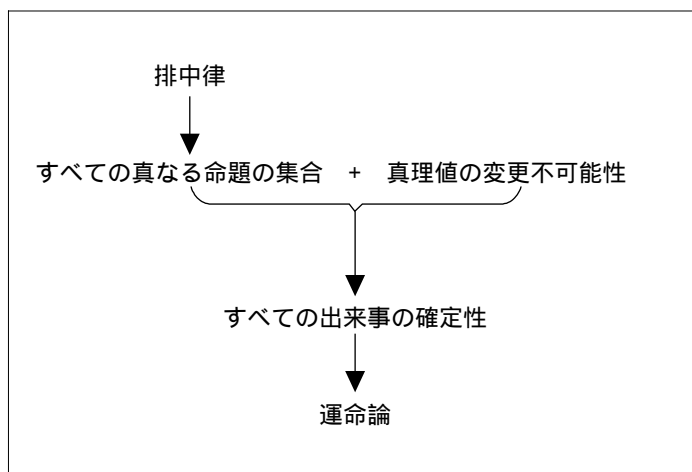


図3

言い換えると、「オズモ」版の運命論は「次の推論 ~ が任意の時点に関して成り立つ」という主張だと見ることができる。

Pまたはnot Pである。.....

もしPならば、not Pは不可能である。.....

もしnot Pならば、Pは不可能である。.....

したがって、not Pは不可能であるか、または、Pは不可能である。.....

は排中律に、は真理値の変更不可能性に相当し、結論のは運命論を意味する。

まず、の排中律は、テイラーによれば、「論理的思考の議論の余地のない法則<sup>21)</sup>」である。

は「命題Pが真なら、Pを偽にすることは不可能である」という意味であり、同様には「命題Pが偽なら、Pを真にすることは不可能である」という意味である。仮にPが「私が座っ

ている」という命題であるなら、 $\neg P$ は「もし私が座っているならば、私は座っていないということは不可能である」という意味になる。確かに、「座りながら座らない（例えば、座りながら立つ）」ということは不可能である。

ただし、これは、「もし私が座っているならば、私は立つ能力を失っている」という意味ではない。「能力は発揮されていないときにも保持されうる」ということを運命論者も否定しない<sup>22)</sup>。しかし、卓越した演奏能力を持つプロのピアニストといえどもピアノがなければ演奏することは不可能である<sup>23)</sup>。に言う「不可能性」とはこのような「実行不可能性」「実現不可能性」のことである。要するに、私は座っているときにも「立つ能力」を失っていないが、（「座りながら立つ」ということが不可能である以上、）座っている限り、私とその「立つ能力」を発揮することは不可能だということである<sup>24)</sup>。そして、これらの前提はテイラーによれば「あらゆる論理と探求の最もありふれた前提<sup>25)</sup>」である。

最後に、結論の「(not Pは不可能) または (Pは不可能)」は「(not Pは可能) かつ (Pは可能)」の否定である。即ち、 $\neg P$ は「私は座らないことができないか、または、座ることができない」という意味であり、非運命論者の「私は座らないこともできるし、座ることもできる、どちらも可能だ」という主張を否定したものである。

～の推論は命題Pの時制に依存せずに成り立つから、もしこの推論が正しければ、結論は任意の時点に関して成り立つことになる。即ち、過去の出来事に関してはもちろん、未来の出来事に関して、Pかnot Pのどちらかに決定している、ということになる。また、この推論の正しさは我々の知識に依存しないから、たとえ、Pとnot Pのどちらが真であるか我々が知らないとしても、そのことは、この推論の正しさを損なわない。

以上が、「オズモ」版の運命論の議論全体の構造である。

### (3) 「海戦」版と「オズモ」版のつながり：条件的解釈の拡張

ところで、「海戦」版の運命論と「オズモ」版の運命論の間には本質的なつながりがある。

上述のように、「海戦」版の運命論において、テイラーは、「必要条件の欠如による実行不可能性」という前提、即ち、( ) 「行為の生起に必要な条件が欠如しているなら、当該行為を実行することは不可能である」という前提をおいていた。そして、この前提に基づいて、「海戦」版の論証において、テイラーは、「今日の私の第二の命令は明日の不戦闘のための十分条件であるから、逆に、明日の不戦闘は今日の私の第二の命令のための必要条件である。もし明日海戦があるのなら、私の第二の命令のための必要条件が満たされないから、私が第二の命令を出すことは不可能である」というふうに推論していた。この条件的解釈を拡張すると次のようにして「オズモ」版の運命論を導くことができる。

「PならばQである」が成り立つとき、QはPが生起するための必要条件である。ところで、「PならばPである」は同一律に基づくがゆえに常に成り立つから、PはPが生起するための必要条件である。すると、もしPが生起しないなら、Pが生起するための必要条件が欠如していることになるから、上の前提( )によれば、Pを引き起こすことは不可能である。他方、もしPが生起するのなら、同様の理由により、Pを回避することは不可能である。Pは生起するかしないかのどちらかであるから、Pを引き起こすことは不可能であるか、Pを回避することは不可能である<sup>26)</sup>。この議論は、時制と無関係に成り立つから、Pが未来の出来事である場合、この結論は未来に関する確定性を意味する。———

このように、「オズモ」版の運命論は「海戦」版の運命論の条件的解釈を拡張したものだと思えることができる。即ち、「PならばQ」についての条件的解釈を「PならばP」に拡張して適用したものだと思えることができる。つまり、「海戦」版における「必要条件の欠如による実行不可能性」という前提は「オズモ」版の「真理値の変更不可能性」という前提へと引き継がれているということである<sup>27)</sup>。というのは、上記文中の「もしPが生起するなら、(Pが生起しないための必要条件が欠如していることになるから、) Pを回避することは不可能である」は、本節(2)の「もしPならば、not Pは不可能である」即ち「真理値の変更不可能性」に対応していると考えられるからである。

「PならばQ」という条件文の場合、「昨日の海戦と今日の見出し」や「今日の命令と明日の海戦」のように二つの出来事を考えることになるが、「PならばP」という条件文なら、ひとつの出来事だけを考えればよい。因果関係には原因と結果という二つの出来事が必要だが、「オズモ」版の運命論はひとつの出来事だけを考える。したがって、「オズモ」版運命論に因果的解釈の余地はまったくないことになる。また、「海戦」版の運命論が過去の確定性から未来の確定性を導こうとしたのに対し、「オズモ」版の運命論はすべての出来事の確定性を直接に主張するから、過去の確定性に依拠することなく未来の確定性を主張できるのである<sup>28)</sup>。

#### (4) 論点先取の誤謬

では、「オズモ」版の運命論、即ち、本節(2)の ~ の推論は正しい推論か。

まず、前提 を認めれば結論 を認めざるをえないことは確かである。言い直せば、この推論が形式的に妥当な推論であることは確かである。したがって、問題の焦点は、前提 を認めるべきか否かという点にある。運命論への対応策としては「 の排中律を未来時制の文に適用することを制限する」という方法が古くから採られて来た<sup>29)</sup>。しかし、本論文においてはではなく の「もしPならば、not Pは不可能である」(および )に注目したい。というのは、前述のように、 の真理値の変更不可能性は「海戦」版運命論と「オズモ」版運命論の本質的なつながりを示すものであり、テイラーの運命論の論証の中心に位置するアイデアだと考えられるからである。

さて、 に含まれている「not Pは不可能である」は「Pは不可避である」と言い直すことができるであろう。すると、 ~ の推論は次のように書き直すことができる。

Pまたはnot Pである。 .....

もしPならば、Pは不可避である。 .....

もしnot Pならば、not Pは不可避である。 .....

したがって、Pは不可避であるか、または、not Pは不可避である。 .....

こうして の「Pが不可避かnot Pが不可避だ」という運命論の結論が出て来る。

しかし、運命論の議論をこのように書き直してみると、 の「Pならば、Pは不可避だ」に注目せざるを得ない。というのは、Pが「私が座っている」という命題であるなら、 は「もし座っているなら、座っていることは不可避だ」と読むことができるが、これはまさに運命論の主張そのものだからである。実際、非運命論者なら、「私が座っているのは、私がそうしようとしたからか、或いは、たまたま人に押されて倒れたところに椅子があったからだ。即ち、私の選択が偶然かであり、いずれにしても不可避ではない」と主張して を認めないであろう。とすれば、 は運命論の主張そのものだと言わざるを得ない。したがって、推論 ~ は(そ

れゆえ ~ は)「証明すべきことがらを前提の内に忍び込ませる」という論点先取の誤謬を犯していることになる。

しかし、 の元の形である は「真理値の変更不可能性」の主張のはずだった。即ち、「命題Pが真なら、Pを偽にすることは不可能だ」という主張のはずだった。いつのまに運命論の主張になったのか。言い直せば、 の「もしPならば、not Pは不可能である。(もし私が座っているならば、私は座っていないということとはできない)」が真であるように思われたのは、なぜか。

それは、 が の「Pならば、Pは不可避だ」としてではなく次の として解釈されたからではないだろうか。

(PならばP) は不可避である。 .....

「PならばP」は同一律から導かれるから不可避だと言ってよい。しかし、 の「Pならば、Pは不可避である」と の「PならばP、は不可避である」とは、似て非なるものである。ここで「不可避だ」を記号「 $\square$ 」で、「ならば」を矢印「 $\rightarrow$ 」で表すと、上記の はそれぞれ次のように書くことができる。

$P \rightarrow P$  .....

$\square(P \rightarrow P)$  .....

このように書き表すと と が別物であることは明らかである。

そして、 を として解釈した場合、論点先取の誤謬は犯さない代わりに、結論 は出て来ないから、推論 ~ は形式的に妥当でない<sup>30)</sup>。他方、 を として解釈した場合、推論 ~ は形式的に妥当であって結論 が帰結するが、論点先取の誤謬が犯されている<sup>31)</sup>。したがって、推論 ~ によって運命論を論証するためには にさらなる根拠を与えて論点先取の嫌疑を晴らさなければならないが、テイラーがそのような根拠を与えているようには思われない<sup>32)</sup>。

#### (5) 必然的真理・現実的真理・可能的真理の範囲の一致

そもそも「真理値の変更不可能性」が、テイラーの言うように、「論理と探究の最もありふれた前提」であるのなら、それは、「(Pが真かつPが偽)は不可能だ」即ち「(Pが真ならPは真だ)は不可避だ」( に相当)ということであって、「Pが真なら (Pが真であることは不可避だ)」( に相当)ということではないであろう<sup>33)</sup>。というのは、後者の の解釈からは、必然性・現実性・可能性という3つの概念の区別の放棄という許容しがたい帰結が出て来るからである。以下説明する。

まず、運命論者も非運命者も次の は受け入れるであろう。(なお、「実現可能だ」を記号「 $\diamond$ 」で表すことにする。)

もしPが不可避ならば、Pは実現する。(  $\square P \rightarrow P$  ) .....

もしPが実現するならば、Pは実現可能である。(  $P \rightarrow \diamond P$  ) .....

は「不可避なことはすべて実現する」、 は「実現することは実現可能なことだけだ」と読むこともできる。また、次の はそれぞれ の逆命題である。

もしPが実現するならば、Pは不可避である。(  $P \rightarrow \square P$  ) .....

もしPが実現可能ならば、Pは実現する。(  $\diamond P \rightarrow P$  ) .....

は「実現することは不可避なことだけだ」、 は「実現可能なことはすべて実現する」と読むこともできる。

しかし、通常我々は 真 は受け入れるが 偽 は受け入れないであろう。即ち、我々は通常、「実現可能なことのすべてではなく一部が実現し、実現することのすべてではなく一部が不可避なことである」と考えているであろう。言い直せば、「可能的真理の一部が現実的真理であり、現実的真理の一部が必然的真理である」と考えているであろう。この関係を図に表すと下の図4のようになる。

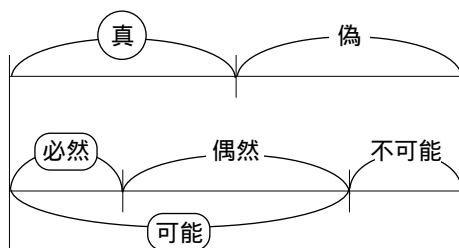


図4

しかし、運命論者は 真 に加えて 偽 も真であると主張している。というのは、 真 は上記の推論  $\sim$  に現れた前提 「もしPならば、Pは不可避である」と同じ主張であり、また、 偽 は 真 から対偶の法則によって導かれる<sup>34)</sup>からである。 真 と 偽 が同じ主張であることはそれらを記号で表わすと明らかであろう。

そして、これら 真 から次の 偽 が帰結する。

Pは不可避だ Pは実現する Pは実現可能だ ( P P P ) .....

結局、運命論者は、 真 の「もしPならば、Pは不可避である」を前提することによって、暗黙の内に 偽 を前提していることになる。そして、 真 は、「不可避なことと実現することと実現可能なことの範囲は完全に一致する」を意味する<sup>35)</sup>。言い直せば、「必然的真理と現実的真理と可能的真理の範囲は完全に一致する」を意味する。この関係を図に表すと下の図5のようになる。

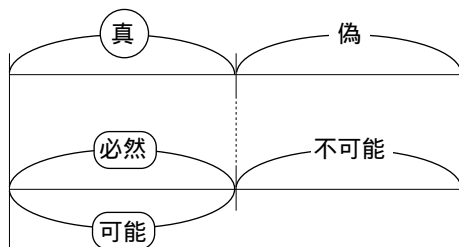


図5

しかし、このことは、「必然性」「現実性」「可能性」という概念の区別を放棄することにならないだろうか<sup>36)</sup>。これに対し、運命論者からは「『範囲の一致』とは外延の一致に過ぎず、

これらの概念の内包の違いは維持できる」という反論がありうる<sup>37)</sup>。しかし、運命論が論理的真理のみを根拠にする以上、その適用範囲はあらゆる種類の命題に及ぶはずである。とすれば、の等値関係はあらゆる命題に対して成り立つのであって、これらの概念の内包の違いを確保できるような命題の領域はどこにも残されていないのではないか。

このように、テイラーの「オズモ」版の運命論の論証において重要な役割を果たしているの「Pが真なら (Pが真であることは不可避である)」は、論点先取の誤謬を引き起こすのみならず、「必然性」「現実性」「可能性」概念の同一視という帰結を伴うのである。

#### (6) 「不可避性」について

しかし、テイラーはこの批判を受け入れないであろう。というのは、次に述べるように、実は、テイラー自身も「命題が真 (true) だということはその命題が必然的 (necessary) だということを含意しない」と言っているからである。つまり、一見すると、彼は (および) を否定しているのである。そして、その上で、なお、自分の言う「不可避性 (unavoidability)」は「必然性 (necessity)」とは別のものであり、命題が真だということから必然性は帰結しないが不可避性は帰結するのだと主張するのである。

では、彼の言う「不可避性」と「必然性」とはどう異なるのか。テイラーによれば、「不可避性」は人間の能力 (human abilities) に関するものだという点が「必然性」と異なる<sup>38)</sup>。

テイラーは運命論への次のような反論を予想する<sup>39)</sup>。

「運命論の議論は『様相の混同 (confusion of modalities)』に依拠している。何かが真だという事実から帰結するのは、その否定が偽 (false) だということだけであって、その否定が不可能 (impossible) だということではない。不可能なのは、その肯定と否定の両方が真であること、或いは、両方が偽であることだけだ。」

そして、この反論に対して、テイラーは次のように答える。

「運命論の議論は、論理学にとっておなじみの意味での不可能性とは何の関係も無い。運命論の議論が関係するのは不可避性である。言い換えれば、運命論の議論が関係するのは人間の能力である。確かに、或る陳述が真だという事実はそれが必然的だということを含意しないし、また、偽の陳述は不可能性を表現しない。にもかかわらず、陳述において、真に (truly) 記述されたことは、たとえ、偶然的なものとして (contingently) 記述されたことであろうと、それを回避することは何人にもできないし、また、偽かつ偶然的に記述されたことを引き起こすこともできない。一方を他方に変えること、即ち、偽であったものを突然真にしたり、真であったものを突然偽にしたりすることはできない。そのようなことはこれまでなされたことがないし、これからも決してないだろう。自分だけはそのようなことができるというのは自惚れというものだろう。この不可能性は何かを同時に真かつ偽にするというような分かりきった不可能性を超えるものである。そんな単純な不可能性に依拠する形而上学などない。」

このように、彼は、自分の言う「真理値の変更不可能性」即ち「真なる命題の記述する出来事の不可避性」は人間の能力に関する主張であって、必然性や不可能性とは無関係だと答弁する。

仮に、テイラーの言うように、不可避性と必然性が別物であっても、やはり の等値関係、即ち、「不可避なこと」「実現すること」「実現可能なこと」の範囲の完全な一致は成り立つ。ただ、不可避性と必然性が別物であるなら、これら3つの概念は外延が一致するだけであっ

て、概念の内包の違いはどこか別の領域で確保される余地はあることになる。では、「不可避性は人間の能力に関することだから必然性とは異なる」というテイラーの答弁は成り立つのか。

成り立つとは思われない。「真理値の変更不可能性は人間の能力不足に起因する」という仮定からは、「人間がもっと能力に恵まれていたなら、或いは、人間以外のもっと能力の高い存在者なら、真理値を変更することが可能だ」ということが帰結するが、テイラーはこの帰結を受け入れないだろう。なぜなら、第一に、本節(2)でも述べたように、彼は、「天地のいかなる力も真なる命題を偽にすることはできない」と言っている<sup>40)</sup>からである。第二に、テイラーの運命論は「論理的決定論」であるから、人間が或る能力をたまたま持っている(或いは持っていない)という偶然的な事実<sup>41)</sup>に依拠した運命論ではないはずである。宇宙の全歴史を記述する真なる命題の集合があるなら、それらを偽に変えることはいかなる力によっても不可能だ、というのがテイラーの主張であろう。要するに、「真理値の変更不可能性」および「真なる命題の記述する出来事の不可避性」は人間の能力という偶然的な事実に関する主張と見るべきではない<sup>41)</sup>。

上の引用文の中で、テイラーは「たとえ偶然的なものとして記述されたものであろうと真に記述されたことは不可避だ」と述べている。テイラーのこの主張をオズモの物語に当てはめれば、「オズモが29歳のときにフォートウェイン空港で死ぬことは必然的ではない(即ち偶然的である)。しかし、不可避だ」ということになる。もし、「必然的」の意味を「論理法則から導出される」ということに限定すれば、確かに、オズモがこのような仕方<sup>42)</sup>で死ぬということを論理法則から導くことはできないだろうから、その意味ではオズモのこの運命は「必然的」ではないだろう。しかし、前述のように、テイラーの言う「真なる命題の記述する出来事の不可避性」は、人間の能力に関する偶然的な事実ではない。この「不可避性」は、命題の真理値が持つ「変更不可能性」という性質を根拠としている。そして、「命題の真理値がこのような性質を持つということは、この世界でたまたま成り立っている偶然的な事実ではなく、いかなる世界においても成り立つ必然的な事実である」とテイラーは考えているように思われる。だからこそ、彼は自分の運命論は「あらゆる論理と探求の最もありふれた前提」に基づいていると主張できたのではないか。要するに、テイラーの言う「真なる命題の記述する出来事の不可避性」は「偶然的不可避性」ではなく、「必然的不可避性」だと見るべきである。それゆえ、「オズモが29歳のときにフォートウェイン空港で死ぬことは不可避だ」ということそれ自体は必然的だということになる。つまり、「オズモが29歳のときにフォートウェイン空港で死ぬことは必然的に生じる」とテイラーは言うべきであった。結局、テイラーの言う「不可避性と必然性とは別物だ」という主張は認めることができない。

以上見てきたように、の「Pならば(Pは不可避だ)」を前提すると、「不可避なこと」「実現すること」「実現可能なこと」の範囲、即ち、「必然的真理」「現実的真理」「可能的真理」の範囲は必然的に一致する<sup>42)</sup>。それゆえ、テイラーの運命論の議論の中で「必然性」「現実性」「可能性」概念の内包の違いを確保するのは困難な課題にならざるをえない。そして、テイラーはこの課題を解決できていない<sup>43)</sup>。



#### 4. 結 論

本論文は、テイラーの提示した「海戦」版と「オズモ」版という2つの運命論の論証の妥当性を検討した。

「海戦」版の運命論は、「過去の確定性 論証 論証 未来の確定性」という構造を持ち、過去の確定性から未来の確定性を導こうとする議論である。過去の確定性を条件的に解釈すればこの議論は成り立つ。しかし、それ以外の解釈（例えば、因果的解釈）の余地がテイラーの議論では排除できていないから、この議論は成り立たない。

「オズモ」版の運命論は、「海戦」版における「必要条件の欠如による行為の実行不可能性」という原理を、より一般的に「真理値の変更不可能性」の原理へと拡張することによって、未来の出来事の不可避性を直接に主張する。しかし、その際、「真理値の変更不可能性」は、「(PならばP) は不可避だ」としてでなく、「Pならば (Pは不可避だ)」として解釈されているが、この解釈は論点先取であるとともに、「必然性」「現実性」「可能性」概念の同一視という帰結を伴う。運命論者は、これらの概念の内包の区別を確保しつつ、「Pならば (Pは不可避だ)」の根拠を与えて「論点先取」の嫌疑を晴らさなければならない。しかし、テイラーの議論はこの課題を果たしていない。

結局、テイラーによる運命論の論証は成功していない。

## 注

- 1) ただし、この物理法則は「一つの原因から一つの結果だけが必然的に生じる」というものでなければならぬ。「一つの原因から複数の結果がそれぞれ一定の確率で生じうる」とする確率論的物理法則から完全な意味での決定論は帰結しない。
- 2) この他に、神の完全性、とりわけその最善性に基づき、「神によって創造された世界もまた最善のものであるから、一通りに確定している」とする神学上の議論もある。ただし、「最善の世界が複数存在しえない」こと（最善世界の一意性）もあわせて証明しない限り、この議論は決定論の根拠にはならない。
- 3) 『命題論』第9章に「明日の海戦」を例とした議論がある。「アリストテレスは『明日海戦がある』のような未来偶然命題に関して排中律の適用を拒否したのだ」と読むことができる。しかし、「アリストテレスは、排中律に制限を加えたのではなく、2値原理に制限を加えたのだ」という読み方（即ち、排中律と2値原理を切り離す読み方）も、[Kneale and Kneale 1962, pp.47-48] や [van Fraassen 1966, pp.493-495] が言うように、可能である。アリストテレス解釈としては留保する。  
また、テイラー自身も [Taylor 1957, p.2] や [Taylor 1962a, pp.63-64] においてはニールやファン・フラセーンと同じアリストテレス解釈をしているが、同時に、[Taylor 1957, p.5] において、2値原理の否定は排中律の改訂を伴うだろうという見込みを述べている。しかし、その後、[Taylor 1963b, pp.66-67] ではアリストテレスへの言及は削除され、テイラー自身は排中律と2値原理の切り離しは不可能だと考えるに至ったようである。
- 4) ディオドロスの運命論は「master argument」と呼ばれている。その内容については [Kneale and Kneale 1962, pp.117-128] を参照せよ。
- 5) テイラーは1919年にミシガン州に生まれ2003年にニューヨーク州にて83歳で死去した。1941年にイリノイ大学を卒業し、1947年にオベリン大学でMAを、1951年にブラウン大学でPh.D.を取得した。ブラウン大学での指導教官はチザム (Roderick Chisholm) であった。ブラウン大学、コロンビア大学、ロチェスター大学などで教え、1985年に退職した。養蜂家としても有名で、養蜂に関する著作もあるそうである。弟子に、ボウイ (Norman Bowie)、カーン (Steven Cahn)、ブランド (Myles Brand)、レーラー (Keith Lehrer)、マック (Eric Mack)、ヴァン・インワーゲン (Peter van Inwagen) らがいる。  
テイラーのプロフィールについては、ホームズによる追悼記事 [Holmes 2004]、および、テイラーの60歳記念の献呈論文集である [van Inwagen 1980] にヴァン・インワーゲンが書いた序文を参照した。
- 6) [Taylor 1962a], [Taylor 1963b, ch.5]。
- 7) テイラーは『哲学百科事典』に「決定論 (determinism)」という項目を執筆しているが、その文献表 ([Taylor 1967, p.372]) において自分の主張を「論理的決定論」に分類している。  
ただし、歴史的には、神学的決定論と論理的決定論のいずれも「運命論」と呼ばれて来た。
- 8) [Taylor 1974, ch.6]。なお、『形而上学』は第3版 ([Taylor 1983]) を経て第4版 ([Taylor 1992]) まで公刊されているが、運命論に関する部分はほとんど同一である。(主人公のオズモの生まれた年が変更されている位である。) 本論文では最も新しい第4版を参照することにする。ちなみに、テイラーは第3版の序文 ([Taylor 1983, p.xix]) において「運命論それ自体が真であることを私は一層確信している」と述べている。テイラーの議論は「或る仮定を置くとそこから運命論が帰結する」ということに留まるのではなく、テイラー自身が運命論者であると言ってよい。
- 9) [Taylor 1963b, pp.62-63]。なお、テイラー ([Taylor 1963b, pp.55-56]) は「我々はみな過去に関して運命論者だ」と言うが、この言い方はミスリーディングである。過去の確定性を認めることと運命論を受け入れることは互いに独立である。「過去と未来とを同等に扱えるか否か」が運命論と

非運命論との間の争点であり、「運命論」という用語は未来に対する或る態度を表していると考えべきである。

- 10) [Taylor 1963b, p.62].
- 11) [Taylor 1963b, p.58].「海戦」版の運命論において、テイラーは明示的に6つの前提を置き、それらは「最も批判的な哲学者さえ疑わなかったものだ」と言う。即ち、(1)排中律、(2)十分条件の意味、(3)必要条件の意味、(4)十分条件と必要条件の関係、(5)必要条件欠如による実行不可能性、(6)時間の因果的無効力、の6つである。この(5)が本文の前提( )にあたる。
- 12) [Thalberg 1980, pp.32-35].
- 13) [Taylor 1963b, p.64].
- 14) ところで、因果の本性をどのように捉えるかというのは難しい問題である。「規則性 (regularity)」「反事実条件 (counterfactual)」「操作 (manipulation)」「確率 (probability)」などの概念を用いた因果概念の解明が試みられている。しかし、因果に関するどんな理論も「因果の一方方向性」を無視することはできないであろう。
- 15) 例えば、筆者自身は過去の確定性の根拠を「出来事個体の出現」に求めている。([伊佐敷 2005a][伊佐敷 2005b][伊佐敷 2006])。 (本論文注29も参照せよ。)ただし、出来事個体と因果性との関係はそれ自体追究しなければならない問題である。
- 16) [Taylor 1974, ch.6].
- 17) [Taylor 1992, pp.58-60].
- 18) [Taylor 1992, pp.56,62].
- 19) [Taylor 1992, p.63].
- 20) [Taylor 1992, pp.61,63].
- 21) [Taylor 1963b, p.57].
- 22) [Taylor 1963b, p.65]は、そのような能力を「熟練 (skill)、体力 (strength)、心得 (equipment)、やり方の知識 (knowing how) の所有という意味での能力」と呼ぶ。
- 23) この例は[Taylor 1963a, p.497]から引いた。
- 24) テイラーの議論が「能力の所有」と「能力の発揮」の区別をなくしてしまうのではないかと、という批判は彼の運命論の最初の雑誌論文[Taylor 1962a]が発表された直後に[Aune 1962, pp.513-514]や[Saunders 1962]などが行った。これに対し、テイラーは[Taylor 1962b]や [Taylor 1963a]で応答し、最終的に、『形而上学』第1版において、「能力 (ability)」という節 ([Taylor 1963b, pp.64-66])を加筆し、本文にあるような主張をした。この点に関するテイラーの応答は適切だと見てよいであろう。
- 25) [Taylor 1992, p.63].
- 26) 同じ指摘を[Abelson 1963, p.96]と[van Inwagen 1983, p.45]もしている。
- 27) これらの前提はテイラーの運命論において本質的な役割を果たしている。実際、「必要条件の欠如による実行不可能性」という前提を欠く場合、「海戦」版の論証は次のようなまったく無害なものになってしまう。
  1. もし明日海戦があるなら、私は第二の命令を出さない。
  2. もし明日海戦がないなら、私は第一の命令を出さない。
  3. 明日海戦はあるか、ないかのどちらかである。
  4. したがって、私は第一の命令を出さないか、第二の命令を出さないかのいずれかである。
- 28) テイラーは、『形而上学』第2版の序文 ([Taylor 1974, p.xvii])において、第1版の運命論の議論は「複雑すぎた」ので第2版では「全面的に書き直し、より単純でより強力なものにした」と言う。
- 29) アリストテレス『命題論』第9章での(「明日の海戦」を例とする)議論をそのように読むことができる。ただし、本論文注3を参照せよ。

ところで、未来偶然命題に関して、現代の論理学では、主に、(1) 3値論理 (ウカシェーヴィチ)、(2) 超付値 ([van Fraassen 1966]), (3) 時制付き真理値 ([MacFarlane 2003], [加地 1987], [加地 1994]), (4) 永久文化 (クワイン)、の4つの対処法がある。これらのうち、排中律は(2)(3)(4)で成り立つが(1)では成り立たない。また、2値原理は(4)で成り立つが、(1)(2)(3)では成り立たない。

私自身は、出来事個体は過去に関してしか存在しないと考えているので、未来時制の文に出来事の名前が現れている場合、それは実は一般名であると考え。過去の確定性と未来の未決定性の対比は、前者にのみ出来事個体が含まれていることによる。あえて未来時制の文に出来事個体の名前を用いた場合、その文は真理値を持たないと考えるべきである。ちなみに、[野矢 2004] は [Mayo 1962]と同様に、現存する物個体が未来に存在することを否定する。しかし、私は未来の出来事個体の存在は否定するが物個体の存在は否定しない。「来週鈴木氏はあの本を返してくれるだろう」という未来時制文における「鈴木氏」は今存在している鈴木氏と数的に同一の人物である。

- 30) 「海戦」版についてだが [Tomberlin 1971] が同じ趣旨の指摘をしている。
- 31) [van Inwagen 1983, pp.43-50]は、「海戦」版運命論における「必要条件欠如による実行不可能性」という前提について、その多義性を批判する。即ち、或る解釈のもとでならこの前提は明らかに真だが運命論は帰結せず、別の解釈のもとでならこの前提から運命論が帰結するが、この前提を真だと考える根拠はない。本節(3)で述べたように、この前提を拡張すると「真理値の変更不可能性」が出て来るが、ヴァン・インワゲンの2つの解釈は「真理値の変更不可能性」の2つの解釈であることにそれぞれ相当すると考えられる。したがって、本論文でのテイラー批判は、ヴァン・インワゲンの「海戦」版への批判を「オズモ」版運命論に適用したものだと言える。
- 32) 図3に示したように、排中律は真理値の変更不可能性の根拠ではない。から は出て来ない。
- 33) 1「(Pが真かつPが偽)は不可能だ」、2「(Pが真ならPは真だ)は不可避だ」、3「Pが真なら(Pが真であることは不可避だ)」は記号を用いるとそれぞれ次のように書ける。

$$1 \quad \text{not} (P \text{かつ} \text{not} P)$$

$$2 \quad (P \vee \text{not} P)$$

$$3 \quad P \supset P$$

1と2は等値だが、2と3は等値ではない。1と2が等値である理由は次のとおりである。

$$\text{not} (P \text{かつ} \text{not} P) = \text{not}(P \text{かつ} \text{not} P) = (\text{not}P \text{または} P) = (P \vee \text{not} P)$$

次に、2と3が等値でない理由を示そう。今、3つの可能世界 $w_1$ ,  $w_2$ ,  $w_3$ があり、これらのうち $w_1$ が現実世界だとする。そして、命題Pは $w_1$ と $w_2$ で真、 $w_3$ で偽だとする。このとき、(Pが偽である世界 $w_3$ も含め)いずれの世界においても「 $P \vee \text{not} P$ 」は真であるから、 $w_1$ において「 $(P \vee \text{not} P)$ 」は真である。他方、 $w_1$ においてPは真だが、(世界 $w_3$ においてPは偽であるから)  $w_1$ において  $P \supset P$ は偽である。したがって、 $w_1$ において「 $P \supset P$ 」は偽である。このように、2が真で3が偽である場合がありうるから、2と3は等値ではない。

- 34) の「もしPが実現するならば、Pは不可避である ( $P \supset P$ )」から の「もしPが実現可能ならば、Pは実現する ( $P \vee \text{not} P$ )」が対偶の法則によって導かれることの証明は次のとおりである。

$$1 \quad P \supset P$$

$$2 \quad \text{not}(P \supset P) \supset \text{not} P \quad (1 \text{の対偶})$$

$$3 \quad \text{not}(P \supset P) = (\text{not}P) \quad (「不可避でない」=「反対が実現可能」より)$$

$$4 \quad (\text{not}P) \supset \text{not} P \quad (3 \text{を} 2 \text{に代入})$$

$$5 \quad Q \supset Q \quad (4 \text{の} \text{not} P \text{を} Q \text{と置く。})$$

$$6 \quad P \supset P \quad (5 \text{の} Q \text{を} P \text{と置く。})$$

- 35) テイラーの議論からこのような帰結が生じることは(「海戦」版に関してだが)、[Aune 1962, p.517] や [Abelson 1963, p.96] が指摘している。

- 36) [ヒューズ, クレスウェル 1981, pp.57-58] によれば, 様相命題論理の体系 (T, S4, S5) に公理として「 $P \supset P$ 」を付け加えると, その体系は, 様相を持たない命題論理へと崩壊する。
- 37) [Cahn 1964, p.303] や [Taylor 1964, p.306]は, これらの概念は「外延的に等値 (extensionally equivalent)」になるのであって「論理的に等値 (logically equivalent)」になるのではない, と反論する。また, カーンは, この等値関係は運命論の「結論」であると言うが, そうではあるまい。この等値関係はテイラーの運命論論証の結論というよりむしろ「前提」の役割を果たしている。
- 38) [Taylor 1992, p.65] および [Taylor 1967, p.361]。
- 39) [Taylor 1992, p.65]。
- 40) [Taylor 1992, p.61]。
- 41) したがって, 「オズモ」版の「真理値の変更不可能性」に対応する「海戦」版の「必要条件欠如による実行不可能性」も人間の能力に限定すべき主張ではない。
- 42) つまり, この等値関係は必然的等値関係である。また, テイラー ([Taylor 1963b, p.58]) は「海戦」版運命論における「必要条件欠如による実行不可能性」について「これは論理法則ではなく, 現代の様相論理学によってすら表現されえない。しかし, 明らかに真である」と言うが, 実は, ここでも彼は, 単に「真」ではなく「必然的に真」だと考えているのではないだろうか。
- 43) ただし, 本論文の議論は, 「必然性・現実性・可能性概念の外延が一致しつつ内包の違いが確保される」ことがありえないということを一般的に示したわけではない。例えば, 「腎臓を持つ動物」と「心臓を持つ動物」という概念の場合, 内包は異なるが外延は一致する。ただし, この一致は偶然的な一致であろう。これに対し, 「二等辺三角形」と「二等角三角形」という概念の場合も内包は異なり外延は一致するが, 外延のこの一致は必然的な一致であろう。つまり, 外延が必然的に一致するにもかかわらず内包が異なるケースは確かにある。そのようなケースが数学的概念以外にもあるのかどうか (例えば「水」と「 $H_2O$ 」のような自然種の場合), さらに「必然性・現実性・可能性」のような抽象的な概念の外延と内包の同一性の基準をどのように考えるべきかという問題については今後の課題とする。

## 文献表

- Abelson, Raziel (1963) "Taylor's Fatal Fallacy," *Philosophical Review*, vol.72, pp.93-96.  
アリストテレス「命題論」『アリストテレス全集 1』岩波書店。
- Aune, Bruce (1962) "Fatalism and Professor Taylor," *Philosophical Review*, vol.71, pp.512-519.
- Cahn, Steven (1964) "Fatalistic Arguments," *Journal of Philosophy*, vol.61, no.10, pp.295-305.
- Gale, Richard M. (ed.) (1967) *The Philosophy of Time*, Doubleday & Co.
- Holmes, Robert (2004) "Richard Taylor Remembered," *Philosophy Now: A Magazine of Ideas*, issue44; <http://www.philosophynow.org/issue44/44taylor.htm>.
- G. E. ヒューズ, M. J. クレスウェル (1981) 『様相論理入門』恒星社厚生閣。
- 加地大介 (1987) 「マクタガートの擁護のしかた - ダメットへの一批判」東京大学文学部哲学研究室編『論集』, pp.163-175。
- 加地大介 (1994) 「真理概念と時制 - ある宿命論者への回答 -」 in [河本, 一ノ瀬 1994, pp.154-185].
- 河本英夫, 一ノ瀬正樹編 (1994) 『真理への反逆: 知識と行為の哲学』富士書店。
- 伊佐敷隆弘 (2005a) 「過去の確定性」日本哲学会編『哲学』第56号, pp.130-141。
- 伊佐敷隆弘 (2005b) 「現在は瞬間か」日本科学哲学会編『科学哲学』38巻1号, pp.31-45。
- 伊佐敷隆弘 (2006) 「出来事と時間: 経験の場としての時間的パースペクティブにおける「過去」と「現在」の生成」『西日本哲学年報』14号, pp.107-127。
- Kneale, W. and Kneale, M. (1962) *The Development of Logic*, Clarendon Press, Oxford.
- MacFarlane, John (2003) "Future Contingents and Relative Truth," *Philosophical Quarterly*, vol.53, no.212, pp.321-336.
- Mayo, Bernard (1962) "The Open Future," *Mind*, vol.71, reprinted in [Gale 1967, pp.275-291].
- 野矢茂樹 (2004) 「宿命論について」『科学哲学』37巻2号, pp.47-58。
- Saunders, John Turk (1962) "Professor Taylor on Fatalism," *Analysis*, vol.23, no.1, pp.1-2.
- Taylor, Richard (1957) "The Problem of Future Contingencies," *Philosophical Review*, vol.66, pp.1-28.
- Taylor, Richard (1962a) "Fatalism," *Philosophical Review*, vol.71, pp.56-66.
- Taylor, Richard (1962b) "Fatalism and Ability I," *Analysis*, vol.23, no.2, pp.25-27.
- Taylor, Richard (1963a) "A Note on Fatalism," *Philosophical Review*, vol.72, pp.497-499.
- Taylor, Richard (1963b) *Metaphysics*, 1st ed., Prentice-Hall.
- Taylor, Richard (1964) "Comment," *Journal of Philosophy*, vol.61, no.10, pp.305-307.
- Taylor, Richard (1967) "Determinism," in Paul Edwards (ed.) *The Encyclopedia of Philosophy*, vol.2, Macmillan Publishing Co., Inc., pp.359-373.
- R.テイラー (1968) 『哲学入門』吉田夏彦訳, 培風館。([Taylor 1963b]の邦訳)。
- Taylor, Richard (1974) *Metaphysics*, 2nd ed., Prentice-Hall.
- Taylor, Richard (1983) *Metaphysics*, 3rd ed., Prentice-Hall.
- Taylor, Richard (1992) *Metaphysics*, 4th ed., Prentice-Hall.
- Thalberg, Irving (1980) "Fatalism toward Past and Future," in [van Inwagen 1980, pp.27-47].
- Tomberlin, James E. (1971) "The Sea Battle Tomorrow and Fatalism," *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.31, No.3, pp.352-357.
- van Fraassen, Bas C. (1966) "Singular Terms, Truth-Value Gaps and Free Logic," *Journal of Philosophy*, vol.63, no.17, pp.481-495.
- van Inwagen, Peter (ed.) (1980) *Time and Cause*, D. Reidel Publishing Company.
- van Inwagen, Peter (1983) "Fatalism," *An Essay on Free Will*, Clarendon Press, ch.2.

なお、本論文は、平成17～19年度科学研究費補助金・基盤研究(c) 課題番号17520022の研究成果の一部である。

(2006年9月29日受理)